

福岡北ロータリークラブ創立二十周年記念

子ども
たちへ

— 歴史に学ぶ思いやりの心 —

占部 賢志

子どもたちへ

—歴史に学ぶ思いやりの心—

占部 賢志

題字 .. 森川 徹氏

発刊にあたって

「木を育てるより、人を育てよう。」

一九八三年、福岡北ロータリークラブは、この理念を持って、発足しました。崇高な理想を掲げて活動して来ましたが、それは一滴の雫しずくでしかありません。そこで創立二十周年記念、成人式を期に、記念事業として、一滴を二〜三滴に何か残さなければと考えて、「育てよう思いやりの心」をテーマに掲げました。

最近の新聞やテレビでは、少年達の「いじめ」「キレる」「無気力」など、荒れる少年達のことが目につき、人のことはどうでもよいという自己中心の気風が蔓延まんえんしています。

この本の物語ものがたりを知ることによって、人につくす豊かな心を養い、胸のどこかにしまいこんだ日本人の誇りを思い出してほしいのです。

こんな気持ちで、この本を、占部賢志先生に執筆をお願いして作りました。発刊にあたっては福岡市教育委員会の多大なご協力を得て実現しました。

日本の心、そして日本人の誇りの火を消すことなく、未来への遺産として伝え、思いやりのある少年達を育てなければならぬという思いです。

平成一五年（二〇〇三）六月七日

福岡北ロータリークラブ

「子どもたちへ ー歴史に学ぶ思いやりの心ー」

福岡県立太宰府高等学校 教諭 占部賢志

はじめに ー著者からのメッセージー

自分のことは自分がいちばん知っていると思いがちですが、はたして私たちはどれだけ自分のことがわかっていのでしょうか。じつは、意外に知らないことが多いのです。何かに触れたり経験したりしてはじめて、自分にはこんなことに興味や関心をおぼえるものがあつたのかということに気づくことが多いのでは
ありませんか。

例えば、坂本竜馬の伝記を読んで竜馬が好きになつたとします。そのとき、なるほど自分の中には竜馬のような生き方に共感するものがあるのかということがわかる。そのようにして、私たちは自分では気づかなかつた「本当の自分」に出会うのです。

そこで、この本ではわが国の歴史を生きた人々をとりあげ、みなさんがどんなふうに感じるか、読んでいただきたいのです。読んでいくうちに、もし心がひかれる場面があれば、そこにあらわれている「生き方」に共感する何かがあるたの中にあるということになります。そして、今まで知らなかつた新たな自分に対面できるでしょう。

内容は大きく二つに分けています。一つは、「世界と日本」という項目です。ここでは国際交流に貢献した日本人を中心に取り上げています。二つ目は、私たちの郷土福岡県にまつわる歴史です。このように配置したのは、みなさんに、つばさを広げて広い視野からものを見る力を養ってもらいたいということと、自分の郷土にも汲めどもつきない感動の歴史があることに気づいてほしいからです。

なお、この本の文章は少し難しいかもしれませんが、いくつかの箇所には「読みがな」や簡単な解説を「注釈」としてつけましたが、それでもわからない場合は、ぜひ図書館で事典などを引いてしらべてみることで、読む力がぐんぐんつくはずですよ。それでは、さっそくとびらを開いて歴史を体感して下さい。

目次

《世界と日本》

- 第一話 「エルトゥールル号救出の物語」 〔日本・トルコ交流の歴史〕……………6
第二話 「ポーランド孤児を救った日本人たち」 〔日本・ポーランド交流の歴史〕……………18
第三話 「五庄屋と八田與一」 〔時空を超えて蘇る郷土と異国の治水事業〕……………30

《郷土再発見》

- 第四話 「遠き日の勇者の物語」 〔大伴部博麻と志賀島の荒雄〕……………50
第五話 「赤十字活動の先駆者」 〔高松凌雲の生涯〕……………66
第六話 「厳冬期の富士山気象観測に挑む」 〔野中到・千代子夫妻の偉業〕……………86

《世界と日本》

第一話「エルトゥールル号救出の物語」

～ 日本・トルコ交流の歴史 ～

平成十四年（二〇〇二）六月、日本と韓国の共催でサッカーのワールドカップが開かれました。わが国も決勝トーナメントにすすむなど活躍しましたが、惜しくもトルコ共和国に一対〇でやぶれてしまいました。しかし、競技が終わったあとは、気持ちよく握手をしあい、おたがいに健闘をたたえあっていた光景は、今も印象に残っています。

ところで、みなさんは、わが国とトルコ共和国とのあいだに感動深い交流の歴史があったことを知っていますか。じつは、両国のあいだには友好のきずなを深めるきっかけとなった出来事があります。どういう内容であったか、以下に紹介してみましよう。

◆危機のメヘラバード空港―トルコ航空機、日本人を助ける―

第二話 「ポーランド孤児を救った日本人たち」

〜日本・ポーランド交流の歴史〜

◆ポーランドの悲劇と日本との出会い

十八世紀の後半、東ヨーロッパに位置するポーランドの周辺にはロシア、オーストリア、プロイセン（後のドイツ）という当時の超大国が存在しました。ポーランドはこれらの国に分割されていき、ついには一七九五年の第三次ポーランド分割により、国土のすべてが消滅^{しょうめつ}しています。

独立運動を展開した愛国者たちは家族もろとも流刑^{りゅうけい}となり、シベリアに送られます。しかし送られても送られても、独立運動は後を絶ちませんでした。このような時代が百年以上続き、二十世紀を迎えました。

ポーランドがロシアの支配下にあった一九〇二年、ポーランドのブロニスワフ・ピウスツキ^{ピウスツキ}という民族学者が来日します。彼は独立運動家の流刑地^{りゅうけいち}であったサハリン^{サハリン}（樺太^{樺太}）でアイ

第三話 「五庄屋と八田與一」

〜時空を超えて蘇る郷土と異国の治水事業〜

わたしたちの国は自然と共存しながら独自の文化を築いてきましたが、必ずしも自分たちの生活を自然に合わせるだけで生きてきたわけではありません。時に必要な場合、自然に手を入れその恵みを最大限活かすように工夫や努力をおこたらなかったのも事実です。

ここでは、その点に光を当てて二つの歴史をひもといてみましょう。一つはわたしたちの郷土に伝えられている江戸期における筑後川開拓の事業、もう一つは台湾の水利事業に尽くした日本人の物語です。

ともに今も高く評価されている史実です。では筑後川にまつわる歴史から話をはじめるところにします。

◆五人の庄屋の決意

九州を東西に横断する筑後川は、わが福岡県だけではなく、その上流は大分県と熊本県、

《郷土再発見》

第四話 「遠き日の勇者の物語」

～ 大伴部博麻と志賀島の荒雄 ～

◆ 六六三年「白村江の戦い」と大伴部博麻

ここでは郷土の二人の人物についてお話します。ともに今から千年以上前に生きた人です。皆さんには実感がわきにくいかもしれませんが、忘れてはならない人です。遠い過去の時代の人であっても、わたしたちの胸をうつ生き方があるのです。

まず、大伴部博麻という人から紹介しましょう。

この人について書かれている昔の史料は『日本書紀』というものです。たいへん古い史料で奈良時代の七二〇年につくられました。このなかにわずかですが、大伴部博麻の記述が出てきます。それ以外には史料はありませんから貴重なものです。

ここではこの史料から読み取れる内容を中心に博麻の人となりと業績にふれてみることに

第五話 「赤十字活動の先駆者」

～高松凌雲の生涯～

みなさんは、国際赤十字社のことを知っていますか。一八六四年、ジュネーブ生まれのアンリ・デュナンが中心となって、戦争で傷ついた人々を助けることを目的としてつくられた国際的な組織です。

今では戦争中だけではなく、平和なときにも病気や災害などで苦しんでいる人々を救うために日々活動したり、また伝染病の予防や子供たちの国際交流などの活動にも積極的に取り組んでいます。

世界の平和のために貢献する赤十字活動には、国際的な組織とそれぞれの国ごとに設けられた組織とがあります。現在では一七〇ヶ国ぐらいの国々が加盟しています。創始者デュナンの誕生日にあたる五月八日は世界赤十字記念日とされています。

わが国では、一八七七年に佐野常民によってつくられた博愛社が、のち赤十字条約に加入し、一八八七年に「日本赤十字社」とその名前をあらためました。創始者の佐野常民は、と

第六話 「**厳冬期**の富士山気象観測に**挑む**」

〜野中到・千代子夫妻の偉業〜

◆気象観測に挑んだ福岡市出身の夫妻

時は明治二十八年（一八九五）のことでした。わが国の近代化は、必ずしも順調にすすんでいたわけではありません。多くの課題をかかえ、苦勞の連続でした。なかでも天気予報の分野は、世界からおくれをとっていました。

たしかに明治八年（一八七五）に気象庁の前身である東京気象台がつくられてはいましたが、実際の指導者は外国の技術者の人たちがほとんどでした。ドイツから派遣されていたクニッペングによって初めて天気予報が出されるようになるのは、明治十五年（一八八二）のことです。

わが国は四季に富んでいますから気象の変化が激しいのです。したがって日頃の天候はもとより台風予報を可能とする研究開発がとよく求められていました。ところが、こうした期